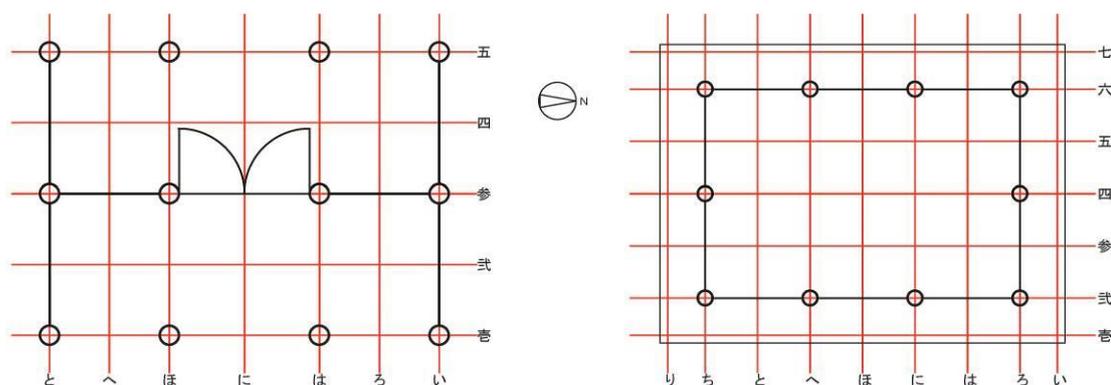


## 修理工事こぼれ話②③ 楼門の当初番付（柱・小屋束の番付編）

以前このコラムで、解体番付（かいたいばんづけ）について紹介しました（「修理工事こぼれ話② 解体番付と番付札」）。解体番付は、修理のために解体した部材を元あった場所に戻すために必要なものですが、造営時にも加工した木材をどこに取り付けるかということを知るようにしておかなければならないため、その時にも番付を設定しておく必要があります。その番付を当初番付（とうしょばんづけ）と呼びます。また、修理中は解体した部材に解体番付を書いた番付札（ばんづけふだ）を取り付けますが、当初番付は部材そのものに墨で書かれていることが多く、今回の修理工事でも、様々な部材から墨で書かれた当初番付が発見されました。今回のコラムでは、楼門の当初番付のうち、柱の番付と、屋根の骨組である小屋束（こやづか）と呼ばれる部材の番付を紹介します。



今回修理の楼門解体番付（左）下層、（右）上層  
このような番付の振りかたを組合せ番付（くみあわせばんづけ）と呼びます

### 1. 柱番付

柱番付の墨書（ぼくしょ）は、柱の側面や柄（ほぞ）などに書かれていました。また、他の部材の柱に取り付いたり接したりする箇所にも柱番付で番付が振られており、下層では虹梁型頭貫（こうりょうがたかしらぬき）などに、上層では斗拱組（ときょうぐみ）と呼ばれる肘木（ひじき）や斗（ます）で構成された部分などに番付の墨書がよく残っていました。それらを総合的に見ることで柱番付の全容が明らかとなりました。

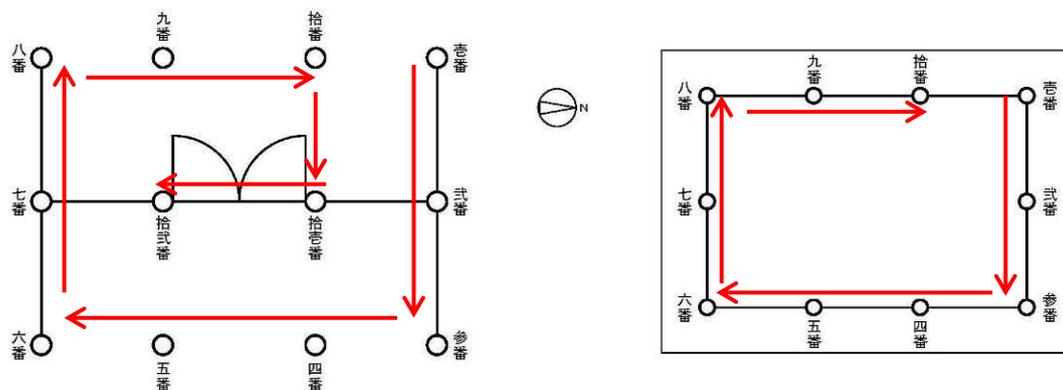


楼門 下層虹梁型頭貫墨書  
「貳(貳)番」と書いてあります



楼門 上層斗拱組墨書  
「四番」と書いてあります

番付の振りかたの特徴は、下層と上層で別々の番付が振られていて、どちらも北西隅の柱がスタートである「壹(壺)番」となっています。そして、「貳番」「参番」…「拾番」と時計回りに外周を一周し、下層はその後中央の柱に渦巻き状に進んでいきます。このように回りながら振られている番付を、回り番付（まわりばんづけ）と呼びます。

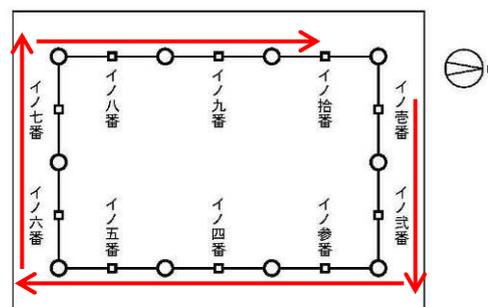


楼門 当初の柱番付 (左) 下層、(右) 上層  
どちらも回り番付です

また、柱ではないですが、上層には柱と柱の間に斗拱組が差し込まれる太い束が立てられています。この束に差し込まれている斗拱組に書かれた番付の墨書から、この束には柱番付と別の番付が振られていることが明らかとなりました。同じく北西隅がスタートの回り番付で、「イノ壺」「イノ貳」…「イノ拾」というように、数字の前にカタカナの「イ」を付けたものとなっています。



楼門 上層斗拱組墨書  
「イノ五番」と書いてあります



楼門 太い束の当初番付  
回り番付です

## 2. 小屋束番付

小屋束番付の墨書は、小屋束そのものに書かれていました。中には墨書が残されていない小屋束もありましたが、発見できた墨書から全容が明らかとなりました。

まず、柱の上の小屋束や上層の斗拱組が差し込まれる太い束の上の小屋束には、柱番付や太い束の番付が振られていました。

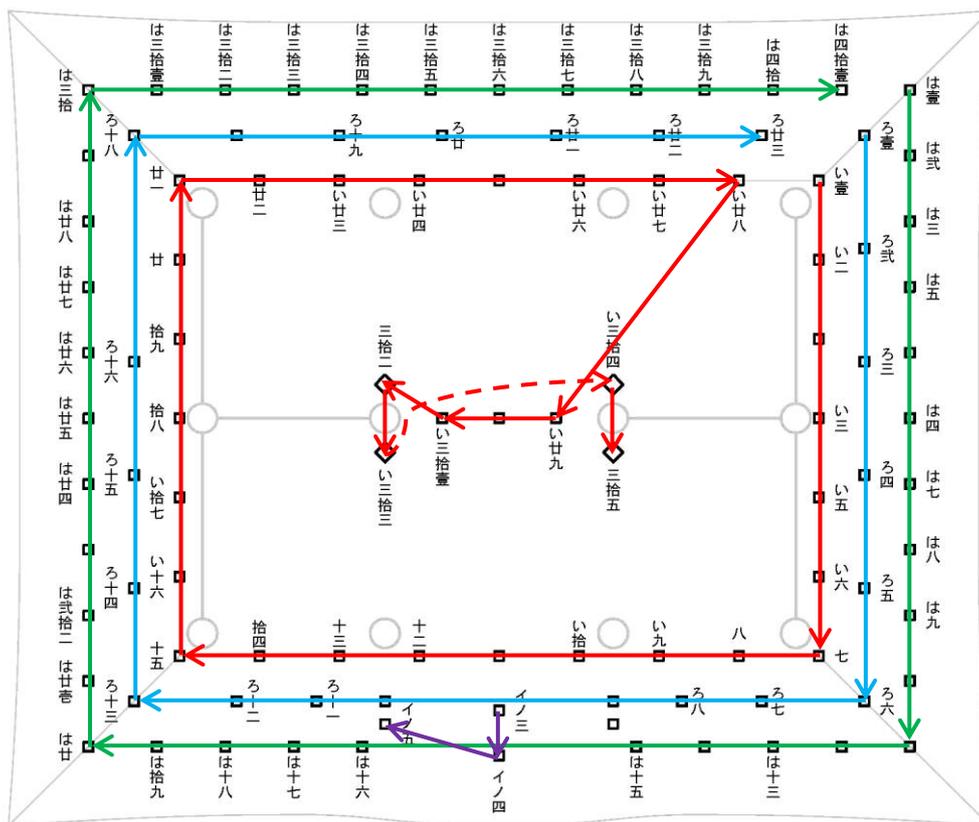


楼門 下層小屋束墨書  
「は 拾一」と書いてあります

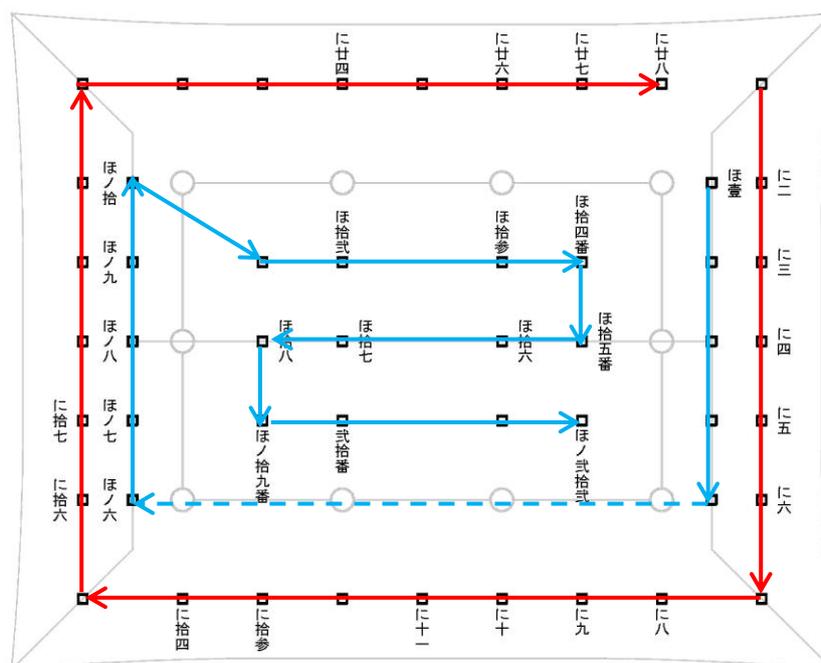


楼門 上層小屋束墨書  
「に 廿(二十)七」と書いてあります

それ以外の小屋束は、「い壹(壺)」「ろ参」「は四」「に五」「ほ六」のように、番号の前にひらがなをいろは歌の順に付けて表していました。また、下層唐破風部分の小屋束には「イノ五」とカタカナの「イ」を付けた番付もありました。番付の墨書が見つかることができなかった箇所も番付を想定し、それぞれのひらがな・カタカナごとに小屋束番付の順番を示すと、以下の通りになります。



楼門下層屋根 当初の小屋束番付  
 赤線 : 「い」番付 → 回り番付  
 青線 : 「ろ」番付 → 回り番付  
 緑線 : 「は」番付 → 回り番付  
 紫線 : 「イ」番付 → 規則不明



#### 楼門上層屋根 当初の小屋束番付

赤線：「に」番付 → 回り番付

青線：「ほ」番付 → 時香番付

ひらがなを付けた番付のうち、「い」「ろ」「は」「に」の番付は、柱番付と同じく回り番付であることがわかつています。「い」の番付も、ところどころ「い」の表記がなかったり最後は変わった順番になったりしますが、回り番付とみてよいと思います。「は」の番付は途中順番が乱れている箇所がありますが、昔の改修の際に小屋束の位置を変えたと考えられます。そして、「ほ」の番付ですが、十一番にあたる小屋束以降はジグザグに進んでいます。このようにジグザグに振られている番付を時香番付（じこうばんづけ）と呼びます。「イ」の小屋束番付は、この番付が振られた小屋束自体が少ないため、どういう順番で振られているかはわかりませんでした。

ちなみに時香番付の「時香」とは、お線香が燃えた長さによって時間を測ることのできる時香盤というものがあり、時香盤の上にお線香をジグザグに配置したことから、ジグザグに振られた番付のことを時香番付と呼ぶようです。

以上、柱番付と小屋束番付を見てきました。これらの箇所では基本的に回り番付が使用され、一部時香番付が使われていました。回り番付も時香番付も古今東西の建物に使われていますが、数字のみや「いろは…」のみで番付を振っていく事例が多く報告されていますので、阿蘇神社楼門の番付の振りかたはかなり複雑といえます。造営時の大工さんたちは、番付を覚えるのが大変だったと思いますが、逆に言うと、複雑な番付もしっかり把握できる優秀な大工さんたちだったとも言えるのかもしれません。

（石田 陽是）

#### 参考文献

清水真一『日本建築生産システムとしての番付の歴史の変遷に関する研究』私家版,1996